

## 地域で輝く女性起業家サロン（第4回） 議事概要

日時：令和7年3月22日（土）15：00～16：00

場所：福島市クリエイティブビジネスサロン

### 【出席者】

|         |                           |
|---------|---------------------------|
| 石山 純恵   | 株式会社クリフ 代表取締役             |
| 菅野 愛希   | 絵かきの庭                     |
| 重巢 敦子   | リファインアカデミー株式会社 代表取締役      |
| 末永 萌    | 洋菓子店 Patisserie Kledor 店主 |
| 樫山 智美   | よつ葉のクローバー 代表              |
| 渡辺 明美   | 一般社団法人アイプロデュース 代表理事       |
| 小安 美和   | 株式会社Will Lab 代表取締役        |
| 横田 響子   | 株式会社コラボラボ 代表取締役           |
| 三原 じゅん子 | 内閣府特命担当大臣（男女共同参画）         |
| 友納 理緒   | 内閣府大臣政務官                  |
| 岡田 恵子   | 内閣府男女共同参画局長               |
| 黒瀬 敏文   | 内閣府政策統括官（共生・共助担当）         |
| 木幡 浩    | 福島市長                      |

### 1. 開会

### 2. 挨拶

（三原大臣）

- ・石破内閣では、女性がそれぞれの地域で働きたいと思えるような仕事があるのか、地方からの人の流出を止めるにはどうしたら良いか、そうした観点で地方創生に取り組んでいる。
- ・「地域で輝く女性起業家サロン」という形で全国を回らせていただき、実際に起業した皆さんの声を聞いている。女性が起業する際や起業した後の課題、それをどう乗り越えてきたのかということや、そのときに皆さんが実際に感じられたネットワークの大切さなどについてもお聞きし、政策の参考にさせていただきたい。
- ・女性起業家の方々の思いは地方創生に結びついてくるものだと思っており、全力で応援したい。

（友納政務官）

- ・今日は、福島市で行われている「姉妹のようにつながる起業チャレンジ」のお姉さん役

の皆さんにもお越しいただいていると思うので、ぜひこれまでの取組について教えていただきたい。

(木幡市長)

- ・地方には女性がやりたい仕事がないなどと言われるが、それならば作ってしまえばよいではないか、また、女性が自ら望む人生を実現していくうえで、起業という形が望ましいならそれを応援しようということで、福島市でも起業女子応援パッケージという事業で支援をしている。
- ・今日改めて皆さんの話を伺い、市としての政策に活かしていきたい。

#### ○起業家の皆様より自己紹介

(石山氏)

- ・2008年に多言語翻訳の会社を起業。東日本大震災後、原発に関する福島県と国際機関等との連携協定の翻訳などを一手に引き受けたことで躍進し、全国商工会議所の「女性起業家大賞」最優秀賞をいただいた。
- ・学童保育所の展開も行い、女性の雇用を創出したことが評価され、様々な国際会議等にも出させていただいている。2022年には国際女性会議WAW!のボードメンバーとして選出され県内外で女性活躍について幅広く活動している。

(菅野氏)

- ・個人事業主としてイラストやグラフィックレコーディングの仕事を行う。福島市男女共同参画センターのWebマガジン「ふくしまさんかく通信」を担当しており、過去に開催された姉妹起業チャレンジの内容などをまとめている。
- ・美大や専門学校を卒業したわけではないが、福島市内の先輩をはじめいろいろなつながりに支えられながら開業し、仕事をしているので、地域のつながりなどにとっても感謝しながら活動している。

(末永氏)

- ・高校卒業後、東京で勉強し、その後新潟で5年程修行。地元が福島であるため戻ってきて、昨年に店をオープンした。
- ・3年前に福島市でやっている起業姉さんの講習に出て、つながりが大切だということや、このような補助金がある、こういう事業計画書を書かないといけない、といったことを勉強してもらい、そのおかげで去年スムーズにオープンまでこぎつけることができた。
- ・今1歳8か月のこどもがいて、子育てと仕事の両立は難しいと思いながら働いている。

(樫山氏)

- ・ 福島県の果樹園の長女で、両親に憧れて就農し、家業として梨、りんご、米の栽培をしていた。結婚後、それぞれの実家で作った果物を使用したパフェなどをフルーツラインという観光道路で販売している。そのほか、女性のキレイと幸せを応援するというテーマでサロンも経営している。
- ・ プライベートでは、20歳、16歳、15歳、10歳の4児の母。子育てしながら仕事をする際のサポートについてお願いしたいと思い参加した。

(重巢氏)

- ・ 2011年1月に起業、2か月後に震災に遭った。当初は人材育成の会社として起業する予定であったが、会津若松という場所が復興できるのかという状態になり、仕事もゼロになった。そのときまたま会津若松市主催の起業支援員の養成研修のプログラムがあり、そこに参加したことが起業支援のきっかけ。ただ、その研修では女性の起業というものに全く触れておらず、むしろ趣味の延長だ、相手にするものではないという風潮であった。それ以降、女性の起業について考えてきた。
- ・ 2016年から4年間は経済産業省の女性起業家等支援ネットワーク構築事業の東北ブロック、2020年からは福島県の潜在的な女性起業家発掘育成事業に携わっており、いろいろな課題が見えてきた。その課題を何とか解決したく、ふくしま女性起業家活躍推進協議会を立ち上げた。やはりネットワークが大事、そして女性起業家自身が起業を目指す女性を育てるという仕組みが一番スムーズだと考えている。

(渡辺氏)

- ・ 宮城出身で、結婚を機に福島に来た。東日本大震災の時に、福島では「県外などに避難したい、こどもの健康について不安があるが、仕事をしなくてはいけない」という家庭がたくさんあって、そのお母さんたち、こどもたちのために自分のスキルと経験で力になりたいと思い2014年に起業した。
- ・ 様々な女性の話を聞き親子活動や母親の勉強会などを開催し、女性が社会で活躍していくうえでの課題解消と自己実現のために、一般社団法人を2019年に設立。その後重巢さんとの出会いもあり、創業したい女性や、母親のための勉強会なども継続している。
- ・ フリーランスの方々の事務所や、集いの場としてのコミュニティスペースも運営している。フリーランスの方々に向けて来客時の臨時の事務所の役割や、創業希望者などの集いの場としてコミュニティスペースも運営している。

○先輩起業家、起業のサポートに従事する立場として本サロンに加わっていただいているコアメンバーから挨拶

(小安氏)

- ・ 会社員として長く働いた後、45歳で起業。現在は全国の人口10万人未満の町を対象に、

ジェンダーギャップ解消のプロジェクトを進めている。中小企業の職場課題を解決し、働きたい女性がもっと働ける社会をつくることを軸に取り組んできたが、このサロンへの参加を通じて、「起業」という選択肢に改めて希望と可能性を感じている。

- ・ただし、起業と一口にいても多様で、規模や形態も様々。女性の起業について、より高い解像度で議論していきたい。

(横田氏)

- ・20年程、「女性社長.net」というサイトを運営している。

### 3. 意見交換

○女性の起業が促進されるためにどのようなサポートが必要か

○どうすれば女性が働きやすいと思える地域へと変えられるか

(石山氏)

- ・最近、「『女性だから』というのはもう古い」、というように女性活躍という言葉に否定的な方もいるが、ジェンダーギャップをなくしていくという考えの下、誰もが働きやすい会社、地域を作っていかななくてはいけないと思うと、まず女性活躍があつて、そこがクリアできたら男性や障害のある方、外国人も、と進んでいくのだと思う。まだ「女性活躍」という言葉はなくしてはいけないと思う。
- ・若い女性が地方から東京に出てしまうということがどの地域でも起こっているが、個人的には、一回外に出たとしても、他の地域を見て、何かのタイミングで戻ろうかなと思ったときに、地方がそう思えるような地域であれば戻ってくるのではないかなと思う。
- ・一番大事なことは仕事だと思う。中小企業や銀行の女性活躍に向けたサポートをしているが、やはりまだ年配の方の意見が強すぎて、そこに対して意見を言えない、という人が多い。1、2回意見しても、古い価値観のまま「俺らはそれで頑張ってきたのだから大丈夫だろう」というように言われることで諦めてしまい、その中で我慢して働こうということになってしまう。
- ・自分が起業する際も、「女性だから上手くいったのだ」と言われたくなかったので、スカートは履かない、懇親会などでもお酌しない、とずっと決めていた。そういった女性に対するうがった見方は地方にはまだ残っていて、そこをどうにかしないといけないと思い、60代、70代の経済を牽引する地方のトップの方々にとっては耳の痛いことを色々言っている。それを受けて取り組み始めたところは採用率も上がり、離職率も下がってくる。100人以下の中小企業が多いので、そこに向けた取組が一番有効だと思う。
- ・国や自治体も一生懸命取り組んでいて、制度自体は進んでいると思う。ただし、行政の中ではそれが使えても、民間企業ではまだ使いづらい、使えないということが起きていて、女性自身の意識も首都圏に比べて低い。「姉妹のようにつながる起業チャレンジ」という形でやってきているが、そこから飛び出てくる人をどう育てるかというフェーズ

になっていくと良い。まずは起業の規模、性質を区分しながら支援の形を考え、整えていくことが必要ではないか。

(菅野氏)

- ・高校卒業後にひきこもりのようになり、自信がない時期があったが、渡辺さんをはじめとする女性起業家の方との出会いをきっかけに、開業までこぎつけることができた。
- ・つながり、認めてもらう環境が大切だと思う。自分は、同じように頑張ろうとしている人、学んでいこうと思っている人と出会える、一緒に学べる場があったことで、安心して自分のやりたいことを言ったり、学びたいことを学んだりすることができ、自分らしく活躍できる方向に導いてもらえたと思っている。起業して終わりではなく、起業後も何かトラブルや困りごとがあったときに誰かにつないでもらえる、お互いに助け合えるという環境があり続けているというのが自分にとってはすごく助かっている。民間でも行政でも良いので地域の中にそのような拠点が一つでもあることが重要で、それを増やすための支援があると良い。

(末永氏)

- ・開業を決めてからオープンするまで5か月程度、その間に事業計画書を作成したり、補助金の申請をしたりなどしていた。幸いにも元々働いていた店での人脈もあり、店をオープンするにあたって困ることはあまりなかった。
- ・「姉妹のようにつながる起業チャレンジ」には3年前に妹として参加した。夫に教えてもらって参加したが、それがなければ知らないままだったと思う。自分は情報を持ってくる人や助けてくれる人がいてとんとん拍子に進めることができたが、他の人はきっとそうではないと色々な人に言われる。起業しようと思っている人や、起業した人の中にも起業姉さんや補助金のことを知らないという人もいて、もったいないと思う。
- ・中学生のときからパティシエになると決めていたが、「女性は特に体力面でも大変だし、給与もあまり高くないから、こどもを育てたいなら辞めたほうがよい」ということは学校の先生や親にずっと言われてきた。自分自身は自分の人生だから何とかする、と思ってやってきたが、専門学校の同じクラスの人の中でも、実際に今もパティシエをしている人は自分しかいないと思う。強い意志があれば続けられるかもしれないが、そこが少し弱い傾向に福島市はあると思う。福島市には飲食系に限らず学校が少なく、郡山や県外に出る必要があったが、自分は学生のころから福島が好きで絶対に帰ると決めていた。しかし友人の中には県外に出て、そのまま仙台や関東で働いている人もいる。学生の頃に、将来の夢や、やりたいことを決めるきっかけがあれば、一度県外に出ても戻ってくる人が出てくるのではないかと思う。

(樫山氏)

- ・約19年前に起業したが、そのころには商工会議所が創業塾を開いていた。当時、自分の家で作っていた果物をJ Aや市場にだけ出荷していたので、フルーツラインという観光道路で直売所を出したいという夢があり、それを実現するために創業塾に参加した。当時は担当者の方が様々なことを教えてくれ、良き仲間にも出会えた。
- ・今、福島市の起業女子応援パッケージに起業姉さんとして参加している。起業姉さん、妹さんのネットワークもどんどんできていて、女性を応援する、サポートするようなものが自分の起業時よりもあり、とても良いことだと思う。
- ・起業してから、継続することが大変。起業して3年位はほぼ赤字に近い状態であったが、家族の存在が励みになった。お店を開いて、すぐ閉じたようでは恥ずかしいと思い、一生懸命やってきた。起業後継続するためのサポートがあったらありがたいと思う。例えば確定申告のような経理面など、優しく教えてくれる人がいると良い。自分が起業したときも、同じ市の職員でもとても親身になって色々考えてくれる方と、そうではない方がいたので、同じサポートでも心ある寄り添ったサポートをしていただけると良いと思う。
- ・起業時は子どもが1人だったが、2人目を産むときに店をどうするか悩んだ。色々な費用もかかるので、出産当日の午前中もお店に行っていたくらい、直前まで働いていたし、出産後もすぐ仕事に戻った。福島市内の知り合いの方で、出産を機に起業した店を閉じてしまった方もいるので、出産や育児のサポートがあると、多くの人が起業し、継続していけると思う。
- ・働きたい地方にするには、職場や家庭の男性の理解、協力がとても大切だと思っている。福島市内で営業職として働いていた女性が、その企業の社長に「女性なのにそんなに給料をもらうのはおかしい」と言われ、歩合給を減らされたという話も聞いたことがある。自分も家族や周りのサポートがあって続けて来られているので、福島市内、社会全体の会社の経営者や、家庭で理解と協力を得られるようなサポートがあると良い。

(重巢氏)

- ・行政が縦割りで、深い溝ができていることが課題だと感じる。経済産業省の女性起業家等支援ネットワーク構築事業は、内閣府の男女共同参画センターの方と、経済産業省側の担当課や商工団体などがネットワークを作って、途切れないサポートをしていく、という趣旨であったが、いざネットワークを作ろうとすると、経済産業省側の支援は「地域にどれだけ貢献できるか、そういう起業家を生むのが経済産業省の役割だ」という立場で、一方、内閣府側の男女共同参画センターは「まずは女性が社会に出て、対等な立場になること、ありたい自分の姿を目指せること」が目的になっていて、起業という視点でみるとどっちつかずになっていた。男女共同参画センター側のセミナーはすごく人気であったが、実際起業するにあたっては経営も学ばないといけない、しかし経済産業省側のセミナーにいくと途端に難しくなり、「自分は起業に向いていない、できない」

となつてとどまってしまう人がたくさんいた。

- ・この溝を埋めたいと思って作ったのがふくしま女性起業家活躍推進協議会。起業を経験した身から、確定申告はこうしたらよい、こんな補助金がある、というような情報提供をして、さらに伸びたいと思う女性がいれば、経済産業省側の支援機関につなぐ、というのがこの協議会に属する先輩女性起業家の役割。このような溝を埋める施策を考えてほしい。
- ・自分のありたい姿を実現できる地域になれば、おのずと人は戻ってくるし、居続けると思う。人が首都圏に行くのは、その地域ではありたい自分でいられないからだと思う。ありたい自分をどうやったら実現できるのか、ということ学ぶ機会を作ること大切で、それが起業だとしても色々な起業の形がある。女性の起業は、スモールビジネスから、地域を牽引する事業体になるものまで様々。それぞれのゴールに合わせたメニューをそろえると、地域でありたい自分を目指せると思う。

(渡辺氏)

- ・「地域の中で自分が困った経験から、何かしら誰かの役に立てることがあるかもしれない」という思い付きで始めたが、行動していくうちにそれが形になっていった。まずは思いから、というのが女性起業家の中には多いのではないかと思う。
- ・暮らしの中で不便なこと、困りごとを改善することが仕事につながっていく。自分の長所や才能に気付かず、それが当たり前だと思って活動している人もいるので、そこを先輩起業家が気づいて掘り起こしていうことで起業につながる人が多い。
- ・まずは情報を行きわたらせること、次に理解してくれる支援者がいること、そしてロールモデルを示すことが起業には必要。
- ・地方と都市部の創業も少し違うと思う。福島は食べ物もおいしくて安い、家賃も安い。東京などに比べて賃金は低いかもしれないが、暮らすうえでかかるお金も少ないので、福島市のようなところは起業しやすいと思う。都会ではできなくても、福島だったらできる、というように、地方のメリットも示しながら起業支援を進めて行けると良い。
- ・働きやすい地域にするためには、小学生からのキャリア教育が必要だと思う。中学生、高校生になってから将来や職業の話をするところがあるが、小学生のうちから、親がどんなふう to 働いて、どんなふう to 暮らしているのか、自分がもし父親だったら母親にどのようなことをしてあげるのか、というように、小さいうちからキャリア教育として、パートナーシップも大切にしながら社会を築いていくということを伝えられたらもっと良い地域になるのではないかと思う。

(小安氏)

- ・支援する側や社会には、「女性起業家」という固定的なイメージがあると感じている。しかし、女性企業家といってもその実態は多様で、企業規模、起業時期、テーマ、投入

できる労力、目指す姿も千差万別である。そうした多様性に応じた支援メニューが、日本社会にどれだけ整っているかが、今問われているのではないか。

- ・ 共通して存在する課題は、日本社会に根強く残る性別役割分担意識だと考える。学校や家庭で「（女性には）飲食業は大変だよ」と言われたり、起業後には「こどもがいるのに起業するの？」「もう一人生まれるのに続けるの？」と声をかけられたりする。女性たちは、人生の節目ごとに罪悪感を背負いながら起業や事業運営をしているのではないか。女性たちの挑戦の意思をくじかない、持続可能な環境を社会全体で整えていけると良い。

（横田氏）

- ・ 中長期的にみて、女性の起業の価値をどう数値で示せるか。短期的に地域貢献ができる、というものではないかもしれないが、中長期的に見て、束になったときに地域に何を返せるのか、ということを見える化することも重要ではないかと改めて感じた。

（石山氏）

- ・ 先ほど渡辺さんからも話があったように、福島市は起業する、自分のやりたいことを実現するという意味でちょうどいい規模感であることが女性起業家を生んでいるのではないか。また、市長が若い人や女性の声を引き上げようと活発に取り組んでいるので、そこで勇気をもらって、私もやってみようか、という気持ちになっているのではないか。
- ・ 年配の方の色々な声をなくすことはできないと思うので、何か言われても動じない心を持った女性を育てていかななくてはいけないのかと思う。一人だと負けてしまうが、連帯して、「こう言われたけど頑張ってやることにした」という人を応援して、自分も何かあったときに反発する、というような仕組みがまさしく生きてくるのかと思うので、行政、民間、一個人と、うまく融合しながら進めて行けると良いと思う。

（末永氏）

- ・ こどもを育てながら働くのは大変。想像はしていたが、実際やってみると想像以上に大変だと思う。例えばこどもが熱を出したときに、夫も出張していると、自分が面倒を見るしかない。祖父母に頼れるという人も周りにいるが、自分はそうではなかった。病児保育やファミリーサポートが利用できれば選択肢が広がると思うが、こどもの体調が悪い時にそばにいてほしいのは誰なのか、と考えるとやはり母親ではないかと思うので、病児保育やファミリーサポートを利用できることが最善とは言い切れないと自分は考えている。数時間でも良いので、お店や自宅でこどもの面倒を見てくれる人がいるという安心感があれば、起業に対するハードルも少し下がるのではないか。
- ・ こどもが1歳になる前に起業を決めたので、「こどもが小さいのにかわいそう」などと言われることも多々あった。こどものためという思いと、自分の仕事をきちんとやりた

いという強い意志がないと、そのタイミングで周りからの声に押しつぶされて起業を辞めてしまうことになると思う。周りのサポートも大事だが、女性自身も強くなないと難しい。情報を共有しながら一緒に頑張れる場があるのはとても良い。

(横田氏)

- ・女性で起業するというのはとても良いキャリアだと思っている。集客や経理、人材育成など、たとえ起業の道で失敗したとしても、そこで得たものは組織に戻ったとしても生きるもの。それなのにマイナスの言葉をかけられるのは邪魔でしかなく、そこを守ってくれるような場が必要だと思う。
- ・やはり対面の支援が良いのか、オンラインで受けられるような支援をもっと増やすべきか、など支援の形も検討すると良いのではないかと。

(木幡市長)

- ・これまでは起業するまでの段階をターゲットに施策を進めていたが、起業後にどうなるのか、というところが課題だと思った。組織化されてしまえばある程度代わりがいるかもしれないが、一人社長で経営するとなると、その間の出産や子育てといったものが、経営にとって大きな障害になり得るということを改めて感じた。その課題も解決できる、ということを示すことが、女性の起業家を増やすことにつながるのではないかと考えており、どのような取組が良いか検討したい。
- ・何よりも社会的な偏見をなくしていくこと、社会的な意識改革を進めることがいかに大事かということを実感した。

(友納政務官)

- ・伴走型支援がやはり重要。事業のことだけでなく、子育てとの両立面など様々な支援が必要だということを感じた。
- ・女性起業家といっても、起業時期や規模、やりたいことなど多様な形がある。スケールアップしていくタイミングできちんとスケールアップをできるような支援をしていくことも、伴走型支援のひとつだろう。

(三原大臣)

- ・起業と言っても、規模や場所などは人それぞれ。「こんなことをやりたいが、実現するためにどうしたら良いかわからない」という人が一步を踏み出せるための後押しが必要。そのうえで、最終的な規模ももちろんだが、自分自身の成果を追い求めるということも大切だと思う。
- ・内閣府と経済産業省との隙間を埋めなければいけないというのはそのとおり。起業するだけがゴールだとは思っておらず、そこからもう少し踏み込んでいこうと思っており、

そのためには伴走支援など様々な策を練っていく必要がある。

- ・小学生からのキャリア教育は本当に重要。女の子に将来何になりたいか、と聞いても「社長」というのはなかなか出てこない。それは保育士、看護師など自分が見てきた人しか思い浮かばない、目指せないからであり、だからこそ子どもたちの見えるところにバリバリ女性で頑張っている社長がたくさんいることは大切で、それが特別なことではないという教育も早いうちからした方が良い。こういうことを発信していくことも、社会への見え方を変えていく根本になってほしいと思う。
- ・何ができるか、何が必要かを考えるときに、「拠点がない」というのは今一番の課題かと思う。全国どこにいても、「ここのセンターに行くと良い」というのがわかっていて、そこで応援、支援してもらえというのが大切。そこにロールモデルとなる女性がいるとよりわかりやすい。そして、起業することがゴールではなく、子育てなどしながらどう苦勞を乗り越えて継続していくか、というところも支援をしていかなければいけない大きなポイント。今日は多くのアイデアや要望を頂けた。

#### 4. 閉会